

論文

絵巻に見る「病のイメージ」—『日本絵巻大成』から—

The image of illness in the picture scroll of *NIHON-EMAKI-TAISEI*

半田 結

要約:本論は、『日本絵巻大成』を手掛かりに、わが国で最初期の絵である絵巻に描かれた病の絵を分析し、病の図像の意味と意義について述べ、病の図像は古代中世の我々の祖先が生き延びていくためには必要欠くべからざるものであったことを明らかにしている。絵画は仏教と共に伝えられたため、その歴史は、礼拝の対象である仏画として描かれることに始まる。平安後期になるとわが国独自の文字や絵の描き方が生まれる。このころから貴族階級や仏教関係者を中心に絵巻が盛んに制作され、鎌倉時代には武家から庶民階級にまで広がっていく。この時期の絵巻を集めたものが『日本絵巻大成』である。ここに描かれた病の図像を抽出・分類して、その描かれ方を整理した。その結果、当時の病の概念は広く曖昧なものだったこと、姿の見えない曖昧な病に対応するには病を可視化した絵がふさわしかったこと、見えない病を描く図像には病の原因と共に仏の御力が描きこまれていること、病を取りまく多数の人々の存在は様々なレベルでの病への関わり方があることが明らかになった。病という個人の体験に形を与えて普遍化し、共有することは、芸術の機能であるとともに、社会の一員として生きる大きな支えであったと結論づけている。

Key Words: 絵巻, 病の図像, 日本絵巻大成

序

人類が誕生したその時から、人はその環境と絶え間ない壮絶なやりとりを繰り返しながら、何らかの折り合いの形を見つけ、生き延びてきた。人類は声による情報伝達、すなわち言葉を獲得する中で、それらを超えるもの、つまり言語での情報伝達以外の非言語的なコミュニケーションの術もまた習得してきた。

人類が社会というより高次の集団、すなわち共同体を形成していく過程で、「生産とは直接関係のないある種の無駄な行為」ともいえる、芸術活動や文化活動が生まれてきた。それは人類が共同で集団生活を営み、共同体として維持していくためにはどうしても必要なものだったからである。逆にいえば、高度なコミュニケーション能力をもったからこそ、ヒトは人となり得たのだといえる。

そのような芸術¹には、三つの機能が認められる。そ

の一つは、生命の保護という主目的から発した意思伝達機能、つまりコミュニケーション手段である。他の一つは人知を超えたものへの畏怖の念、信仰である。さらに別の一つは、これら二つから発した癒し（慰め）の機能である。

その後、社会の近代化にともなって、宗教や特権階級に独占されていた芸術は次第に広く一般庶民も享受するところとなる。絵画は、宗教の教義や教え、為政者や特権階級の権威の記録や伝達から、庶民生活の記録や伝達、装飾、表現へと幅を広げていく。

ところで、社会福祉は近・現代社会において発展を遂げ、今日に至っている。社会福祉の究極の目的は、個々人がおかれた社会において、社会の一員として自立した生活を送れるよう支援することにある。つまりすべての人が「人たるに値する生活」を享受することにある。具体的には社会福祉は「日常生活上の基本的要求」を充足させることを目的とする²。しかしながら、現代社会では人間として生きる・生活するための基本的な要求そのものを自覚し得ない、あるいは不自由さは感じていたとしてもそれを表出・表現できない人々が存在する。これらの人々には、「人間として生きる」という自覚・認識を

¹ 「芸術」という言葉は18世紀にヨーロッパで誕生した概念であり、時代を超えまた出自の異なるものをその名の下に包括的に語ることは適切とはいえないことを承知しつつ、本論では今日一般に使われているように人類がものを生み出してきた創造的な活動を示す言葉として広義に用いる。

² 岡村重夫『社会福祉原論』全国社会福祉協議会、1997。

取り戻し、実現することが重要となる。

先に述べたような芸術が持つ三機能は、人類が古代より追求してきた「生きる」機能を保持・継承するために見出してきたものといえる。つまりこれらは、「人間として生きる」「社会の一員として社会生活を送る」ことを意味している。この芸術の機能を社会福祉に用いることは、「人間として生きる」「社会の一員として社会生活を送る」ことの意義を自ら再認識する原動力となる有効な方法・手段となると考えられる。芸術は、他者とのコミュニケーションと同時に自分自身や人知を超えたものとのそれをも可能にする。芸術とは個人のやむにやまれぬ衝動をその源とし、それに形を与えて普遍化する試みである。それによって共同体はバランスをとり、回復する。「生きる」ことの根幹は、芸術がもつ三つの機能とぴったり重なるものである。ここに「芸術」と「福祉」の究極の目的が融合する。

本論は、「芸術」と「福祉」の究極の目的を達成するため、芸術の科学化を試みるものである。その際、わが国の絵画の歴史において最も早い時期のものといえる絵巻を用い、古代の人々は苦しみ（病）に対していかなる対応をしてきたのかを明らかにしながら、絵画という存在が病の受け入れに果たす役割を明らかにしたい。治療法もほとんどなかった時代、病はどう捉えられ、人々はどのようにそれに向かっていたのか。描かれた病、あるいは病人は何を意味しているのか。そして病の絵はなぜ描かれるのか。古来、人々の苦しみのひとつであった病を手掛かりに、以上の視点で整理する。³

なお、本文の中に今日差別用語と考えられる表現があるが、関西福祉大学社会福祉学部倫理規定に基づき、史料の時代背景や歴史的価値を尊重し、用語をそのまま用いていることをお断りしておく。

1 絵画の歴史における「絵巻」の位置づけ

わが国の絵画⁴の歴史は、仏教とともに始まり、飛鳥・

³ 本論では、本人の不快や不調に基づいて用いられる病という言葉を使用する。病者やその他の人々がどのようにその症状や状態を認識しそれらに反応するのかを探りたいと考えるからである。A. クラインマン（江口・五木田・上野訳）『病の語り—慢性の病をめぐる臨床人類学』誠信書房、1996。

⁴ 本論では「絵画」を限定的に、平面に描かれた可動性のあるものとする。つまり壁画や障壁画等は含まないこととする。「絵画」を色や形・線によって図柄が印されたものとする。土器の表面等に描かれたもの等も含まれることになるからである。原田はお産土器と呼ばれる深鉢に描かれた文様を日本の絵画の最古の遺例ではないかとしている。原田昌幸『縄文文化と東北地方—東北の基盤文化を求めて』文化科学研究所、1994年。

白鳳時代⁵に絵画制作のための人材や素材が朝鮮王室の支援のもとに整備されたことに始まるとされる⁶。高度な大陸文化の移入を受け、美術史上では仏教美術の大きな影響を受けた時代である。この飛鳥・白鳳から次の天平にかけては、仏教的な主題による絵画（仏画）が盛んに制作される⁷。

さらに律令制度の整備に伴い、^{えだくみのつかさ}画工司という官営の絵画制作機構が設けられる。ここでは絵画のみならず建築・仏像・繡仏など様々なものが集団制作された。釈迦の前世と現世の関係を説いた過去現在因果経に絵をつけた『絵因果経』8巻本が数種作られ、その一部が醍醐寺や上品蓮台寺などに残っている。これは上段に絵、下段に経文という体裁になっており、絵巻物の祖形といわれている。⁸

平安時代は8世紀末から12世紀末まで約400年続くが、ここでは3期に分けて特徴を概観する。以下、前期は9世紀、中期は10～11世紀、後期は12世紀にほぼ対応する。

前期（794～894）は、空海らが唐から持ち帰った密教の影響により、絵画が注目されるようになった時代である。空海は、膨大な經典とともに曼荼羅や祖師の画像などの多くの絵画を唐から持ち帰り、真言の經典は「隱密」で「図画」の形を借りなければその真意は伝えられないという。空海による純密移入によって、それまでは彫刻主体であった仏教美術において絵画（仏画）が重視されるようになったのである⁹。

仏画のほかに、9世紀には貴族の日常生活に密着した世俗的な絵画も多く描かれ、それらは唐風のものであったと考えられる。画の名手が宮廷のために絵画制作をし

⁵ 飛鳥時代は仏教公伝の538年から645年の大化の改新まで、白鳳時代はそれ以後の710年の平城京遷都までを指す。538年に百済の聖明王から欽明天皇に仏像、経論が贈られたことが仏教公伝の記録である。

⁶ 公式記録として、588年に飛鳥寺造営のために百済から画工が遣わされたこと、610年には高句麗の僧が紙、墨、顔料を伝えたことが載っている。辻惟雄『日本美術の歴史』東京大学出版会、2005、p.56。以下、絵画の歴史については同書参照。なお、わが国では古来自然の中に人知を超えたものを見出し、木や岩などの自然物を畏れ敬っていたため、仏教伝来以前、神像は作られなかった。図録『国宝大神社展』東京国立博物館、2013。

⁷ 天平時代は794年平安京遷都までを指す。図録『白鳳—花ひらく仏教美術』奈良国立博物館、2014。

⁸ 辻、前掲書、p.77。

⁹ 密教とは仏教の中の秘教で、大乘仏教の最終段階であらわれたものである。「純密」とは、現世利益を目的とした「雑密」から発展し、解脱成仏を目的とする体系的で本格的な密教のことをいう。

たという記録はあるが、絵は現存していない。

中期（894～1086）は、遣唐使の廃止による国交の途絶と、かな文字や和歌など、いわゆる「国風文化」創造の流れの中で、美術にも「和様化」¹⁰の動きが始まる。この10、11世紀は宮廷に代わって貴族の藤原氏が政治を支配するようになる。絵画は曼荼羅を中心とする密教の図像や、浄土教絵画、釈迦図像などの仏画がさかんに描かれる。儀礼に用いられる仏像と仏画はどちらも「仏」として記録され、特に仏画は「絵仏」「画仏」「仏の絵像」と記すことが多かった¹¹。

一方、9世紀後半に和歌文学が始めると、四季の風景などの日本的な画題で屏風絵、障子絵が描かれるようになる。これは10世紀末の「やまと絵・倭絵」の誕生につながる¹²。この「やまと絵」は日本的な絵画の代名詞ともいえるものであるが、障子や屏風などの日常の調度品に描かれるのが主で、残っているものは極めて少ない。この時代の絵画は少なく、保存状態の関係から鑑賞に適さないものがほとんどである。

後期（1086～1192）は、白河院による院政美術の時代であり、「和様化」はさらに爛熟・繊細化していく。この時代は絵画が栄えた時期であり、それらは仏画、装飾経、絵巻に大別される。仏画が盛んに作られ、また経典を写経し社寺に奉納することが貴族の間で流行した。華麗な料紙や金銀の箔を使った装飾経を奉納することで、現世の災厄を免れようとするものである¹³。この時期の絵巻は、日本美術の独創性が最もよく表れているものである。その特徴を今井清は次のように述べる。「絵巻物にみられる視点の移動や転換は、論理的には互いに相容れないような姿勢や態度、また悟性的にはむしろ積極的に矛盾しあうような対象の描写を、ひとしくみずからのうちに並立せしめることができる」¹⁴。

わが国における絵画は、その始まりにおいて信仰や宗教儀礼に直接関わるものであり、絵画がそのまま「仏」

そのものを表していた。当時、絵画は貴族などの限られた人々だけのもので、経や絵画は現世の苦しみや災厄から免れるために描かれ、奉納されるものであった。それらは絵馬などに形を変えて、21世紀の現在まで続いている。

絵巻は、わが国の絵画として最初期に位置する、わが国特有のものである。そもそも絵巻とは物語絵画の一種で、文字が書かれた部分（詞書）と絵が描かれた部分が交互につなが合わされて、何らかの物語を視覚的に表したものである。基本的に言葉が先にあり、それに絵をつけるというスタイルをとる。

絵巻研究は、絵巻の主題に応じて分類し、その作品の特徴や表現の相違、作者の特定などが美術史や仏教美術の研究者を中心に探求されてきたが、近年は歴史学や国文学、民俗学などの分野から絵巻が参照あるいは史料として用いられるようになってきた。

本論で病の苦しみへの対応を絵巻に求めるのは、次のような理由からである。第一に、詞書と絵というそのスタイルにある。言葉と絵という表現方法は、絵に込められた内容を読み取るうえで大きな助けとなる。もちろん言葉と絵による表現はかならずしも一致するとは限らないのではあるが¹⁵。第二に、絵巻は、物語性と絵画性とが一つの総合芸術として統一的に形成されているものであり、わが国独自の形式を確立した¹⁶。絵巻は「日本の心性」にかなった形式であり、日本的感性によって確立されたものである¹⁷。とするならば、そこに描かれた病気もまた、わが国独自の表象の仕方がなされているはずである。第三に、奈良時代に描かれた現存する絵画のほとんどは仏教を主題とし、その後も密教の曼荼羅図など宗教画が多くを占めるなか、絵巻が多く制作される平安以降は、仏教がテーマではあってもいわゆる世俗的な表現が多くみられるようになる。信仰の対象としての仏画ではなく、人々の苦しみである病を描くことにはそれな

¹⁰ 和様化は仏像や仏画、建築など様々な分野で進展し、繊細さ、優美さ、調和的等の特徴とする。

¹¹ 泉武夫「王朝仏画論」京都国立博物館編『王朝の仏画と儀礼』至文堂、2000、p.334。

¹² やまと絵は世俗画に分類される。秋山光和『平安時代世俗画の研究』吉川弘文堂、1964。本論では絵画の主題によって仏画（宗教画）と世俗画を分けて考えているが、両者の境界はあいまいで相互関連的であることも確認しておきたい。辻惟雄『日本美術の歴史』東京大学出版会、2005、p.132。

¹³ 巻物形式の装飾経として、平清盛が1164年に厳島神社に寄進した「平家納経」が有名である。

¹⁴ 今井清「日本美術の装飾性」『人文論究』25（2）、関西学院大学、1975、p.24。

¹⁵ 絵と言葉があるとき、それらは互いにひとつのことを説明していると考えがちであるがイメージはつても多義的でありイメージと言葉にはズレが生じる。ロラン・バルト（篠沢秀夫訳）『神話作用』現代思潮社、1967。

¹⁶ 絵巻という形式は、中国の「変文」という経典の内容を説いた説話絵巻にはじまるといわれる。またわが国ではかな物語の発展とともに登場した物語絵も絵巻の由来だと考えられている。

¹⁷ 絵巻は、鑑賞者の主観的側面を重視する感性的直観的統一の空間展開であり、西洋の作品に見られる客観的側面を重視した構造的有機的な統一ある空間とは異なっている。今井はこの日本の統一を非連続の連続と表現する。今井清「日本美術の装飾性」『人文論究』25（2）、関西学院大学、1975、pp.17-19。

りの意味があると考える。

絵巻に表された病や病苦についての先行研究には、美術史や図像学の立場から加須屋誠、鷹巣純、佐野みどり¹⁸ら、医学史分野から新村拓¹⁹らがいる。また民俗学の立場で絵巻から民衆の生活を読み解いている宮本常一は、絵画表現から病と信仰の関わりを指摘している²⁰。加えて歴史を文学史料と絵画史料から同時に読み解く黒田日出男の研究は、絵画史料からしか読み取ることができない民衆史を明らかにしてきた。そこでは言葉では示されていない病や障害と思われる民衆の存在が明らかにされている²¹。

このように様々なジャンルから絵巻を研究対象とすることは、古代中世のわが国の価値観の重層性を明らかにすることであり、筆者は絵画療法及び社会福祉という視点から、絵巻に描かれた病を分析しようとするものである。

本論では手掛かりとして、古筆学²²を提唱した小松茂美(1925-2010)²³の編著による『日本絵巻大成』を用い、分析対象とする。この『日本絵巻大成』(全27巻、中央公論社、1977～79年)は、『続日本絵巻大成』(全20巻、同、1981～85年)および『続々日本絵巻大成』(全8巻、同、1993～95年)と共に、絵画・詞の料紙すべてを絵カラーで収録したわが国初のシリーズもので絵巻研究の基礎となったものである²⁴。現在では研究機関によるデジタルアーカイブ等が整えられつつあるが、今なお絵巻の鑑賞、研究の決定版であることに変わりはない。本論では

『日本絵巻大成』27巻を用い、わが国の絵画－絵巻に表された最初期の病のイメージを探ることにしたい。

2 『日本絵巻大成』とそこに描かれた「病」

(1) 『日本絵巻大成』の構成

『日本絵巻大成』は全27巻からなるが、一つの巻に複数の絵巻が収録されているものあり、収められている絵巻の数は47巻である。これら47巻の絵巻の制作年代は12世紀から16世紀にかけてのもので、鎌倉時代のものでその中心を占めている²⁵。

絵巻には、『源氏物語絵巻』などの物語絵巻、『伴大納言絵巻』などの説話絵巻、浄土信仰や末法思想と関わる『地獄草子』『飢餓草子』などの六道絵巻などがあり、内容で分けることもある。これらはすべて平安後期のもので、この時期は国宝に指定されるほどの質の高いものが制作され、絵巻の黄金期といわれる²⁶。

続く鎌倉時代も絵巻が盛んに制作された時代で、平安末期の絵巻制作の技法の上に、さらに新たな様式が加わり多彩な絵巻が作られるようになる。それ以前の宮廷世界だけではなく、武家や社寺でも絵巻の受容と制作が行われる。『北野天神縁起』などの社寺縁起、『西行物語絵巻』『一遍上人絵伝』などの高僧伝、『平治物語絵詞』『蒙古襲来絵詞』などの戦記絵巻、『伊勢新名所絵歌合』などの歌仙絵、歌合絵といった、新しいテーマの絵巻も制作されるようになる。

南北朝(14世紀)になると、絵巻は以前にも増して幅広い層を対象として量産化され、それに伴い個人の鑑賞に適した親しみやすい庶民的表現があらわれる。『福富草子』などの御伽草子絵巻は宮廷貴族にも好まれた。とはいえ量産の結果、質の低下を招いたことも否定できず、やがて冊子形式の絵本等が登場し、絵巻は次第に廃れていく。

本論で取り上げる『日本絵巻大成』は、鎌倉時代のものである。中心として、宮廷社会で受容された絵巻をはじめとして、次第に武家社会や寺社社会でも受容されるようになった絵巻までが収められている。また内容も、物語絵巻や寺社縁起絵巻から御伽草子絵巻に至る幅広いジャンルに渡っている。絵巻の一部が欠けているものもある

¹⁸ 加須屋誠『生老病死の図像学』筑摩書房、2012。鷹巣純「四苦図像の系統と展開－病苦と死苦の図像を中心に－」『密教図像』第12号、1993。佐野みどり『風流造形物語』スカイデア、1997。

¹⁹ 新村拓『日本仏教の医療史』法政大学出版局、2013。

²⁰ 宮本常一『絵巻物に見る日本庶民生活誌』中央公論社、1981。

²¹ 『一遍上人絵伝』での白い覆面の人々の存在などである。

²² 古筆学とは、筆跡などを手掛かりに文章の内容や筆者、書写年代を明らかにする学問で小松が開拓・樹立し、古典研究に大きく貢献した。江戸時代以前は文学作品などすべて人が手で書き写した写本というスタイルで読み継がれてきたが、平安・中世の古典作品で美術的にも価値のある写本は愛好家の求めに応じてその大半が紙片に分割、裁断された。絵巻も同様である。

²³ 東京文化財研究所アーカイブデータベースより、物故者記事、小松茂美 <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/28493.html>

²⁴ この出版は、従来、絵を中心に行われていた絵巻研究に対して、絵巻の詞書もすべて収録した画期的なもので、絵巻研究に新たな一歩を開いた。これにより絵巻の成立や制作目的の解明につながった。吉田克己『満身これ学究－古筆学の創始者、小松茂美の闘い』文藝春秋、2008、pp.235-238。田中登『小松茂美 人と学問－古筆学60年』思文閣出版、2002、pp.59-64。

²⁵ 室町以降の絵巻は『福富草子』『福富草子クリーブランド美術本』『百鬼夜行絵巻』の3巻のみである。前二つは同一の絵巻を写したものと見られており、詞書・絵とも同じ内容である。

²⁶ この時期の絵巻に後白河法皇が果たした役割は大きく絵巻制作はいわば国家的事業だったといえる。

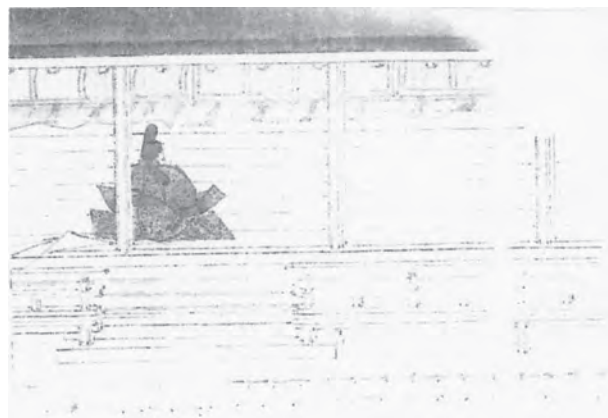
が、総じて極めて質が高く保存状態の良い絵巻を、小松が選択し編集したものがこの『日本絵巻大成』であり、絵巻物を概観するに適切であると考えられよう²⁷。

(2) 『日本絵巻大成』に描かれた病

1) 絵巻から病を探す

絵巻の特徴として、基本的に最初に詞書があり、次に絵の料紙がくるという形式をとる。したがって絵巻における病の表出方法としては、詞書に病気の存在が示され、それを説明するように絵が描かれているものがほとんどである。まずは詞書を手掛かりに、病であることやその病状が詞書と絵の両方に示されているものを抽出した。なお詞書については、『日本絵巻大成』の各巻末にある読み下し文に従った。

しかし、なかには詞書に病の存在が示されていても絵には直接描かれていないケースもある。たとえば図①に示すように、御簾の向こうに天皇がいると思われる手前に宮中の大臣が控えているという場面などで、詞書のみで病が示されているものである（『信貴山縁起絵巻』）²⁸。さらに絵だけに病が表されているというものもある。たとえば『一遍上人絵伝』で、これは一遍を取り巻く人々や背景に、病を患っていると思われる人が描かれているケースである。図②に見られるように、この絵巻に見られる白い被り物をしている者は、癩者とその監督者であり、特定の病の所在を表す表現となっているこ



図① 『信貴山縁起』

²⁷ 一般に、絵巻は制作された当初のものが絵巻形式で残る場合もあれば、鑑賞や保存などのために詞書や絵のそれぞれの部分を裁断した断簡として残される場合も少なくない。また一つの絵巻は、ほぼそのまま写されて残っているもの（模本）や、ほぼ同じ内容であるが若干相違する部分があるもの（異本）など、複数の写しが存在する。

²⁸ 絵巻には身分の高い者ほど顔をあらわに描かないという伝統がある。山本陽子『絵巻における神と天皇の表現—見えぬように描く—』中央公論美術出版社、2006、pp.213-236。

とが明らかにされている²⁹。

このようにして、詞書と絵の両方に病の表現が見られるもの、またはどちらか一方にのみ病の表現が見られるものを合わせた“病が描かれている絵巻”について整理したものが【資料1】である。全47巻のうち病が描かれているのは15巻、また“病が描かれている箇所”は全部で60か所である。

2) 描かれた病と病の描かれ方

i) 詞書にみえる病と描かれた病

ここで絵巻に登場する病の名称を、詞書から確認しておこう。まず『病草子』であるが、現存する『病草子』は病のみが描かれた特異な絵巻である。ここには、「白子」「鼻黒」「二形」「霍乱」「陰虱」「痔瘻」「失明」「歯周病」「小舌」「風病」「不眠症」「口臭」「肥満」「幻覚」「鳥目」「不明」³⁰の16種類の病が描かれている。そこには「陰虱」「痔瘻」などの現存する病から、「鼻黒」「小舌」など存在



図② 『一遍上人絵伝』



図③ 『病草子』 「霍乱」

²⁹ 黒田日出男『境界の中世象徴の中世』東京大学出版会、1986、pp.238-240。

³⁰ これは鍼治療を受ける男が描かれているもので、病状等是不明である。

が疑わしいものまで描かれている³¹。

これらの病は家族や周りにいる人物などと一緒に、その病の状態がはっきりわかるように、あるいは説明的に描かれている。たとえば「霍乱」（下痢嘔吐を伴う急性胃腸炎）では、病人である女が縁から尻を突き出して便をし、口から何か吐いている様子が描かれている（図③）。

この絵巻ではほとんどが目に見える症状を直接描いているが、その病状が目に見えない場合は、特殊な描き方をしている。たとえば図④は、今でいう精神的な病を表したものである。鉢巻をして寝ている男の枕頭に背丈が五寸ほどの小法師が棒を持って描かれ男の方に迫っていくように描かれている。そばにいる女房には小法師は見えていない様子で、小法師は男の頭の中だけの存在、幻影である。

これと同様に、目に見えないものを可視化して描いているものに「多きに悩み給ひ」という詞書で高貴な身分の病者が衾をひきかぶって脇息にもたれ、耳から蛇が頭を出しているものがある（『北野縁起絵巻承久本』）。これは怨霊に取りつかれている様子を表したものとされる。このように目には見えない病の病状や病の正体は、形が与えられ、目に見えるように描かれている。

その他、詞書にあらわれる病名としては「癰瘡」（腫物）、「中風」（脳出血等による障害）、「瘧」（マラリア性熱病）、「癩病」³²（皮膚病）があげられるが、いずれも病者や病状などは描かれていない。

詞書があり病者や病状が描かれているものは、帝が見守るなか、病床の後に侍女が薬碗を渡そうとしている様子を描いたもの（『華嚴宗祖師絵伝』）、「みかきのごと



図④ 『病草子』 「幻覚」

³¹ 現代の病名、現代語訳については各『絵巻』及び次を参照。立川昭二『日本人の病歴』中央公論社、1976。

³² ここに出てくる癩病とは必ずしも現在のハンセン病のみを示すものではなく、広く皮膚を侵された病である。酒井シヅ『日本疾病史』放送大学教育振興会、1993、pp.154-166。立川昭二『病気の社会史』岩波書店、2007、pp.37-62。

くはれて…よにいまじきやまひ」に対応して胸をはだけた病者の体に赤い発疹があるもの（『粉河寺縁起』図⑤）、「寝食常ならず…病悩は」と書かれていて病者である一遍の顔面が蒼白になっているもの（『一遍上人絵伝』）、「病痾に遭ひ」という詞書に対応するように看病人が寝姿の病人の額に手を当てているもの（『東征伝絵詞』）、「重病にをかされて」とあって病者が白い鉢巻きをして衾をひきかけ瞑目しているもの（『石山寺縁起』）などがある。これらのうち、その症状が直接描かれているのは、図⑤に示した赤い発疹があり異臭がするという病であるが、詞書からその症状はわかっても病名は記されていない。

病者の顔色が悪かったり、額に手を当てたりする³³というのは現代と変わらないが、白い鉢巻きをするというのは特殊な表し方である。これは病の種類に関わらず魔除けとして行うもので、病者を表す図像のひとつである。白い鉢巻は合戦に臨む武士や山伏などにもみられるが、病の標識としてよく用いられるものである³⁴。

また詞書に示されている「御悩」、「悩」、「病」、「患ふ」、「病悩」、「病痾」、「例ならぬ心地」に対応する絵を見みると、病者が横たわって衾をひきかぶったり、僧や看病人と思われる人がそばにいたりといった表現がほとんどである。詞書で病が示されてはいても、病名は特定できない。

さらに、詞書にはないが病の存在がわかるものとして、前述の白い被り物をした人は癩病を患っていると考えられる人々である（図②）。

いずれにしても、詞書にみられる病の表現には「みかきのごとくはれて」といったように症状を表す表現や、「腹を患ひ」と病んでいる場所を示した表現、漠然と「例



図⑤ 『粉河寺縁起』

³³ 病気やけがなどに対する処置などをいう手当ては、まさにこの手を当てるといふ行為からきている。

³⁴ 新村拓『日本仏教の医療史』法政大学出版局、2013、p.152。

【資料1】 「日本絵巻大成」にみられる病

巻	絵巻物名	病気の状態が描かれているもの ×直接病状として描かれていないもの	病状の詞書による表現	病人 △は病者、 ▲は白い被り物	病人のいる場所 (*は詞書より特定)	病の画像 (描かれているもの)
1.1	源氏物語絵巻	○産後の肥立ち/心労 ○病気の状態が描かれているもの ×直接病状として描かれていないもの		女三宮 柏木 源氏の妻紫上 後醍醐天皇 後醍醐天皇	*源氏の館、六条院の一室 *一条の柏木邸 *二上院の紫上の邸	袖で顔を覆い、横たわる 寝舎、白い枕で衾を掛ける 脇息にもたれて衾を掛け、袖で顔を覆う
4	信貴山縁起絵巻	×	御悩重く煩はせ給ひて 御悩大事におはします	後醍醐天皇 女	なし なし	なし なし
7.3	病草紙・関戸家本	○白子 ○鼻黒親子 ○二形 ○霍乱 ○陰風 ○痔瘻 ○(偽医者の手で)失明 ○(菌周病) ○小舌 ○風病 ○不眠症 ○(口臭) ○(肥満) ○(幻覚) ×(不明) ○(鳥目)	しろこというものあり はなのさきすみぬりたるやうにくろかりけり かたちおとこなれども女のすがた 霍乱といふ病あり つびしらみ しりのあなあまた かためはつぶれはて くちのうちのはみなゆるぎて こした 風病 よるになれどもねいらるることなし いきのかあまりにくさくて 身こえしあままりて行歩たやすからず 持病をもちたる × ×	女 男 男 男 男 男 男 女 女 女 男 鍼を受ける男 女 榮叡 榮叡 長者の娘 帝の最愛の后 后 后	なし なし 通り 室内 室内 濡れ縁 室内 屋外 室内(畳の上) 室内 室内 室内 室内 室内 室内 室内 室内 室内 室内(畳の上) 寺院風の建物の中 山中の外 室内 なし 后の寢所 なし	白髪白面の女 鼻黒 二形 嘔吐、下痢 害虫 脱糞 偽医者、メス、出血 顔の歪み 小舌 顔の歪み・震え 鼻をつまむ 両脇から身体を支える人 頭に白鉢巻き、歪んだ表情、枕頭に棒を持つたたくさんの小法師 医師と患者、僧侶 寝姿、看病人が頭に手をあてる 榮叡と鑑真が向かい合って座る 体中に赤い発疹、胸がはだけている なし 衾をひきかけ横臥、薬湯の椀 なし 衾をひきかぶり、脇息に持たれる、耳から蛇 枕頭に妻、僧が祈禱
16	東征伝絵詞	○病病に遭ひて ○病冒し		榮叡 榮叡		
5	粉河寺縁起	○体中の発疹・異臭 ○腫瘡	みの…みかきのごとくはれて…く ささかざりなかり… 腫瘡(ようそう)の病を憂ふ いかやうにか、みえさ給らん 后の病悩	帝の最愛の后 后		
17	華嚴宗祖師絵伝 (元曉絵)	○腫瘡		帝の最愛の后 后		
21.1	北野縁起絵巻承久本	○多きに悩み給ひ		左大臣時平 小柴垣の家の主人	*左大臣時平の邸 *小柴垣の家	

巻	絵巻物名	〇病気の状態が描かれているもの ×直接病状として描かれていないもの	病状の詞書による表現	病人 △は病者 ▲は白い被り物	病人のいる場所 (*は詞書より特定)	病の図像 (描かれているもの)
21.2	北野縁起絵巻弘安本	○	なやみ給ひて	左大臣時平	*左大臣時平の邸	衾をひきかぶり, 脇息に持たれる
		○	1. 2年病みて	阿闍梨	なし	なし
19.1	住吉物語絵巻	○	をまくわづらひて	細工職人の妻	なし	なし
		○	例ならぬ心地の覚えければ	姫君の乳母	なし	なし
別巻	一遍上人絵伝	○	例ならぬ心地の覚えければ	姫君の乳母	*乳母の家	姫が袖で顔を覆う
		×	×	△非人小屋	*天王寺近くの熊野街道	
		×	×	△	*京の印旛堂	縁の下で横たわる, 裸
		×	×	▲白い被り物	*信濃国佐久郡伴野の市	白い被り物
		○	中風	悪党	*常陸国	なし
		×	×	▲白い被り物	*鎌倉鶴岡八幡宮近くの若宮大路	白い被り物
		×	×	▲白い被り物	*鎌倉片瀬の館の御堂の周辺	白い被り物
		×	×	▲白い被り物	*尾張甚目寺	白い被り物
		×	×	▲白い被り物	*大津の浜の関寺の門前	白い被り物
		×	×	▲白い被り物	*京都七条大路の東堀川の西 (空也上人遺跡)	白い被り物
		○	患ふ事の御座いましてけるに	一遍 + △	*桂川 + 桂川の道場	なし
		○	腹をわづらひ給ひける	一遍	*丹波国穴生寺	なし
×	×	△	*美作国一宮	なし		
×	×	△	*上野の踊屋	なし		
○	寝食常ならず	一遍	*淡路国福良	なし		
×	×	▲白い被り物の男	*淡路島志筑の天神社の鳥居の横	白い被り物		
○	○	一遍	*淡路〜明石の浦	顔面蒼白		
×	×	▲白い被り物の男	*観音堂の板扉の外	白い被り物		
×	×	▲白い被り物の男	*観音堂の板屋の周り	白い被り物		
○	×	教願	*教願の住房	衾をひき被り横臥, 瞑目		
○	御悩み	御一条天皇	*御所	なし		
○	御瘡病重く	敦良親王		なし		
18	石山寺縁起	○	瘡病	松君の長者の女子	*石山寺	なし
		○	重病にをかされて	園城寺の住僧・円兼僧都	*園城寺	白い鉢巻き, 衾をひきかけ瞑目
24.2	稚児観音縁起	×	病悩をうけ	稚児	*老僧の居房	衾をひき被る
25.2	福富草子 (春浦院本)	○	いみじき薬	福富	福富の家	下痢, 葉碗
25.21	福富草子 (クレーブランド美術館本)	○	いみじき薬	福富	福富の家	下痢, 葉碗

ならぬ心地」や「寝食常ならず」といったものがみられる。特殊な身分の人に対して用いられている「御悩」や病気の特殊な状態を示す「病痾」という表現も含め、詞書からすぐには病名を特定することが難しいことはもちろん、病因を推測することも容易ではない。症状や具合の悪い場所を言葉や、時には絵で表しながらも、病については「悩」「病」「患う」といった言葉で表している。病は非常に広い範囲の不調や状態を示すものであった。

ここには、現在の私たちとは全く異なった病気に対する考え方が表出されている。酒井シヅは、10世紀に成立した辞書から病名を探し出し、当時の病名は「病名というより症状そのものを極めて具体的に表現している」と述べている³⁵。かつてはつつがなく働くことができれば健康という時代だった。そもそも病名という発想自体、本人の自覚がなくても医学的な客観的な事実によって病気であると判断しようとする現代的な概念である。古代中世においては、個人の不調や不快が主となり、それが周りの人々にも認知されるようになったものが病であり、病はそのようにかたちづくられていたのであった。³⁶

ii) 病の描かれ方

このような広く曖昧な概念である病は絵ではどのように描かれているか、今一度その描かれ方を整理しておこう。

病の描かれ方として、下痢、発疹、顔色が悪いなど、外的な症状をそのまま描くことは絵を見る者にとってもわかりやすく、絵師にとっても容易である。一方、外的にははっきりと症状が出ない病や心の病などの場合は工夫が必要で、「悩」など精神的な病や怨霊による病とされるものは、枕頭に小法師が描かれる、耳から蛇が出ているというように、目には見えない病状を具体的なものを描き入れた特殊な表し方をしていく。

また、病者の姿として非常に多く描かれているのは、横たわる、あるいは脇息にもたれて衾をかけるというものである。衾をかけて横たわることや脇息にもたれることは、特に病気ではない時にも見られる図像であるが、どのような病であれ横たわるということはもっともわかりやすい病のシンボルといえる。そもそも甲骨文字の「やまいだれ」は人が寝台に臥している形、また人が寝台上

でもがき苦しむ形を示す³⁷。つまり病むことは苦痛の為に正常な生活ができず、床についてしまった状態を示すのである。そして「病」の文字は、病気になって身体が弾力を失ってぴんと張って動けなくなったからだの状態（丙）で、寝込んだ様子を示した字である³⁸。きわめて象徴的である。

さらにその際、白い着物を着ていたり、白い鉢巻きをしたりしている。平安末以降は貴族の間では白絹が肌着として用いられて日常的なものであったが、昼間にも白衣姿でいるというのは病者のしるしである。わが国では古代から白色は最も聖なる色であり非日常性を表す色であった。³⁹

ところで、このように病者やその病を描くという方法以外に、看病する人や治療・祈祷にあたる人が病者と一緒に非常に多く描かれていることは、注目にあたいる。

帝や貴族は当然のことながらそばにいる者が多いが、貴族以外にも、『粉河寺縁起絵巻』では体中に発疹が出ていて異臭を放つ長者の娘のそばには、袖で自分の鼻を覆っている女と夜着を持って鼻をつまむ女が、さらには粉河寺本尊の観音菩薩の化身である祈祷する童子も描かれている。さらに庶民を描いたと考えられる『病草子』「鍼を受ける男」では、几帳と障子で囲まれた畳敷きの部屋で男がうつぶせになって鍼医から治療を受けているが、その様子を奥の几帳の間から女の子がのぞき、画面右から数珠を持った僧侶がのぞき込んでいる。『一遍上人絵伝』では非人とされる白い被り物をした病者が描かれているが、それらは鳥居の周辺や門前に小屋がけをして複数で住んでいる様子がわかる。⁴⁰

病のある所には、必ず人がいるのである。病人の周りにはいわゆる治療者である医師や僧侶よりも、はるかに多くの付き添う人や見舞う人が描かれ、中には見物する人が描かれているものもある。見方を変えると、病はどこにでも描かれ、人々がそれぞれの身分や状況に応じた生活を送るなかに、病者もまた描かれているのである。

新村拓は、古代中世の絵巻に描かれた特徴的な病の図像として次の12種類をあげている。①鉢巻をする、②白い覆面をする、③傍らに薬器を置く、④着衣を白くす

³⁵ 酒井シヅ『日本疾病史』放送大学教育振興会、1993、pp.9-18.

³⁶ 新村拓『日本医療史』吉川弘文堂、2011、pp.7-17.

³⁷ 尾崎雄二『大字源』角川書店、1992。白川静『字通』平凡社、1997。諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店、2001.

³⁸ 酒井、前掲書、1993、pp.11-12.

³⁹ 新村拓、『日本仏教の医療史』法政大学出版局、2013、p.156。前田雨城『色』法政大学出版局、1980、pp.18-83。白い動物は瑞祥として改元されたこともあったほどである。

⁴⁰ 網野善彦『中世の非人と遊女』講談社、2005、pp.92-128.

る、⑤病人の額に手を当てる、⑥顔色を変色させる、⑦臥床させて衾を引き被らせる、⑧脇息によりかからせる、⑨上半身を裸にする、⑩疫神・疫鬼を描き添える、⑪特有の症状を描いたり痛む部分に手を当てる、⑫屋外の小屋に住む、である。⁴¹

これは本論で見てきたこととほぼ重なるものであり、病であることを表す図像は、極めてパターン化されているといっていだらう。絵師による表現の微妙な違いはあれども、基本的な図像は変わらないのである。そしてこれはわが国の表現の特徴でもあるが、病の図像は現実を写しているというよりも、デザイン的に描かれ、約束事として描かれている。漫画的な表現に近い、というよりも漫画の源泉こそが絵巻であった。⁴²

3 絵巻にあらわれた「病」のイメージ

(1) 見えないものを描く病の図像が意味すること

ここまで見てきたように病の図像とは、見えない病を見えるように描いたものである。病の苦しみという外からは見えないものを一定のパターンとして描き可視化すること—これこそが絵巻の役割である。

病を描くことは、日常のなかでの病の析出であり、病を描くことで見えないものに形を与え、治癒への物語を与えることである。絵による表出という可視化によって、病の正体が見えてくる。病が自他ともに認められる、自覚されるのである。病には、たとえば「鬼」という形が与えられ、退治する方法が様々に考えられるようになる。形が与えられることで漠然としていた病が焦点化され、厄病を追い払う対象が定まる。現代でいえば、病名がつけられることでひとまず安心することに近いだらうか。それによって治療方針が定まり、とりあえず進む方向や対応が見えてくる。

描かれた病は、また、病を焦点化し、それによって病からの解放という道筋が神仏によって約束されていく回路が与えられるといってもいいだらう。同時にそれは、絵と言葉で語られる仏の教えを広めていくということと同義であった。

目には見えない病の正体は小法師や蛇で描かれていた

⁴¹ 新村拓『日本仏教の医療史』法政大学出版局、2013、pp.151-174.

⁴² 辻惟雄『日本美術の歴史』東京大学出版会、2005、pp.428-433。加藤周一『日本その心とかたち』徳間書店、2005、pp.319-346。なお絵巻は漫画の直接のルーツではないとする主張もある。それらについては次を参照。山本陽子「『大人げないもの』が発達するとき—相似形としての絵巻とマンガ」『美術フォーラム21』Vol. 24。醍醐出版、2011、pp.23-28.

が、病を癒す神仏やその化身もまた見えるように描かれていたことを確認しておこう。たとえば『粉河寺縁起』には病に侵された娘を看病する女たちと共に仏の化身である童子が描かれている。また『石山寺縁起』には、癩病を患っている娘が寺に参籠し眠っているところに、山頂にいる黒衣の僧が描かれ夢の中で病を癒す様子が描かれている。これらは病を癒す仏の御力を示す存在であり、寺の縁起に直接関わるものである⁴³。

描くという病の焦点化はまた、病者と病者ではない者を区別するようにも働く。病であることは仏罰を受けているということである。⁴⁴

病の原因としても、またその治癒の仕方としても見えない超越的なものが働いており、それを表出できる方法は絵だったのである。絵巻を見る人は、通常では見えないものをも見ることができるとする視点、つまり神仏の視点を持ちえた。口伝や書き言葉としても伝えられてきた仏の御力は、絵という方法でより一層のリアリティを持ったに違いない。と同時に、絵を見る人は、通常は隠されている神仏の顕現を目の当たりにすることになった。絵によって、人はより一層仏を尊び、より一層病を忌避することになったに違いない。

(2) 病との向き合い方が意味すること

病は誰にとっても一大事であり、いつかは自分も病にかかるかもしれないといった不安や恐怖心を醸し出す。その意味において、病は他人ごとで済ませられるものではなかった。治療法がほとんどなかった時代、そのような病者がいる場面には、不安や恐怖にさいなまれながら周りを取り囲む多くの人々が描かれていた。一緒に描かれる人々は身分によって異なっているが、実際にそうだったか否かにかかわらず、その絵を見た人々はその絵を、その病とそれを取り巻く状況を共有することになる。病は個人の問題であるよりも、その集団の問題であった。加須屋がいうように「生老病死の苦しみを個人の視点から捉えるのではなく、…共同体全体の問題として把握することが私たちの祖先には必要不可欠な知であった」⁴⁵。

このように病苦を個人の問題としてだけでなく、家

⁴³ 当時、病とは仏罰によって生じるものであり、治病は仏教に求められ、仏こそが名医であった。仏教には治病息災延命という現世利益が期待されていたのである。新村、前掲書、pp.12-13.

⁴⁴ 加須屋は『病草子』をそこに描かれている者たちを他者とみなし病者と貶める目的で描かれたと指摘する。加須屋誠『生老病死の図像学』筑摩書房、2012、pp.168-185.

⁴⁵ 加須屋、前掲書、p.266.

族や社会共同体のそれとしてとらえるまなざしは、もっと見直されていい視点ではないだろうか。今日、病気になったのは個人の管理が不十分な表れであると、その原因は徹底的に個人に還元され、苦しみは病者だけの問題である。そうしたとらえ方に疑問を抱くこともない善意の無意識は、病者を孤立させる。病は個人的な経験であり、それを誰もが体験することはできないが、絵や言葉、芸術によって人に伝えわちあひ、自覚することができる。そういった意味で、苦しみを表現し受けとめる器として、絵は、芸術は存在する⁴⁶。

加須屋は、掛幅形式の仏教説話画を主に取り上げ、病者が描かれる場所と病の描かれ方に注目して病者を分類して、市場の外れや寺の門前などで肩を寄せ合って日々を暮らす「路上の病人」と、室内にて手厚い看護を受ける「室内の病人」に分類している。病人が路上で生活するのは病＝仏罰があるからであり、共同体から排除される病者と、祈祷や受け手厚い看護を受け寛容な態度で扱われる病者である。もちろん室内で手厚く看病される病者もやはり病の原因は仏罰であり、この世は無常であることに変わらない。こうした病者の描かれ方は、共同体による排除と寛容という病者への接し方を表している⁴⁷。

「路上の病人」は排除されていたのであろうか。描かれることは病看が対象化されることである。排除に向かう以前に、黙認とでもいうべきあり方で存在が認められていたのではないか。ちなみに網野善彦は、「路上の病人」が多く描かれている『一遍上人絵伝』を一遍による非人救済の物語と位置付けている⁴⁸。

病のまわりには、病を恐れ忌避し不安にさいなまれる人々や排除する人々がいるなかで、様々な人々が病者の世話をし、手当てをし、祈祷し、気にかけてたり、気かけられたりという一種の病の共同体ともいえる関係が形作られているように見える。病がきわめて身近だった時代、病の苦しみという普遍性を共有することで、時にはあきらめながらもどうにか折り合いをつけ、生きのびようとしていたことの表れと考えられる。

古代中世、われわれの祖先の病への向き合い方とは、病という誰にでも起こりうる出来事を忌避・排除・受

容・黙認という形で共有することであった。病とはその時代や社会の価値観と密接に結びついている文化的な表象そのものであり、同じように絵もまたその時代や社会の価値観を鏡像として描き出す文化的な表象そのものである。

結

本論は『日本絵巻大成』を手掛かりに、病に限定して論じてきたが、そもそも古代中世社会においては病と死は直結して考えるべきものであり、死や死に至る過程が描かれた「地獄絵」や「六道絵」などを除外したことは不十分なものとわざわざを得ない。今後の課題としたい。また、今回取り上げた絵巻は総じて身分の高い限られた人々のものである。絵画が高貴な人たちだけのものであったことを考えると、現世を描くことで救いを乞い、慈悲の心を表明したとも考えられる。とはいえ、病に焦点化することでみてきた、病への向き合い方は示唆に富む。

病の図像とそのイメージは大きく二つに整理できる。一つは描かれること、可視化されることで、見えないものを恐れつつ、救いや癒しを希求するという、人々の願いである。二つ目は、病を核としたコミュニケーションである。病の図像とは、病に対する人々の無意識があぶりだされたものであり、忌避と受容、そして黙認という関わり方が表わされているものである。病の図像は、人々の苦しみであると同時にその苦しみを受け止めることであり、治癒への願いであると同時にその願いを受け止めることである。礼拝の対象として導入された絵は、描かれるものが異なってもなお、視覚に訴えるアウラを持ち得た。それによって人は生きながらえることができた。信仰と癒しとコミュニケーションによって「人間として生きる」「社会の一員として生きる」力となった。

東日本大震災を受け、2014年3月11日～5月6日まで、国立歴史民俗博物館で「歴史にみる震災」展が開催された。それにあたり学芸員の山内宏泰は「学術的な記録ではだめなんだ、表現でないと人の心には残らないんだ」と語っている⁴⁹。

人の心に残るもの、それが絵画という表現であるならば、病を描くこと／描かれた病の絵を見ることは、再びその苦しみを感ずること自分だけではなかったと、自分を外部に開くことに他ならない。自分を外部に開いて

⁴⁶ 山口昌男『病の宇宙誌』人間と歴史社、1990、pp.29-38。

⁴⁷ この排除と寛容に加え、死によるあの世への回路を病との関わり方であるとする。加須屋誠『生病老死の図像学』筑摩書房、2012、pp.139-186 pp.241-267。

⁴⁸ 網野善彦『中世の非人と遊女』講談社、2003、pp.92-128。

⁴⁹ 『美術手帳』1010号（2014年6月号）、美術出版社、2014、p.18。

いくそのことこそ、「社会の一員として社会生活を送る」
ことの第一歩となる。

参考文献

- 富士川游『日本医学史』裳華房, 1904.
五味文彦『絵巻で読む中世』筑摩書房, 1994.
———『中世のことばと絵』中央公論社, 1990.
小松和彦『異人論 - 民族社会の心性』筑摩書房, 1995.
中島洋一郎『病気日本史』雄山閣, 1995.
中原祐介『ヒトはなぜ絵を描くのか』フィルムアート社, 2001.
新村拓『古代医療官人制の研究』法制大学出版局, 1983.
———『日本医療社会史の研究: 古代中世の民衆生活と医療』
法政大学出版局, 1985.
酒井シヅ『日本の医療史』東京書籍, 1982.
———『疫病の時代』大修館書店, 1999年.
服部敏良『奈良時代医学の研究』東京堂, 1945年.
———『平安医学の研究』桑名文星堂, 1955年.

本研究は、科学研究費助成事業（基礎研究(C)）の成果であるこ
とを付記する。